

【審査論文】

「かるみ」継承の一態

——『別座鋪』『続別座敷』の分析から——

佐藤 勝明

A Succession of Basyo's "Karumi"

——An Analysis of Betsuzashiki and Zokubetsuzashiki——

Katsuaki SATO

キーワード：俳諧・芭蕉・かるみ・別座鋪・続別座敷

芭蕉の俳諧を全的にとらえようとするのであれば、「かるみ」の問題を避けて通るわけにはいかない。『俳文学大辞典』（角川学芸出版）の「かるみ」の項（尾形仿執筆）によれば、それは「芭蕉が円熟期以後、終生の課題とした究極の俳諧理念」で、「三次に及ぶ深化の過程をたどる」のであるという。すなわち、「蕉風様式の確立を見た『おくのほそ道』の旅中、「古び」の自覚の中から胚胎」し、「過剰な表現の抑制による渋滞感の打破が図られた」のが第一次、『ひさご』『猿蓑』期に、「素直な自然観照による平明な表現を志向、内心のリズムがそのまま句姿に定着するような内外合一・無作為・無分別の工夫が凝らされ」たのが第二次、「以後最晩年にかけて」、「いっさいの芸術的身構えを捨てて日常性の中に詩を求め日常の言語をもって表現する道が模索され」たのが第三次という見方であり、大枠において首肯に値する。

注目すべきは、第二次に「無作為・無分別の工夫が凝らされ」たとの指摘であり、私見によれば、これは第三次の「模索」においても基本的に同様である。本稿は、その「工夫」「模索」の内実を明らかにし、「かるみ」期の連句作品を実態に即して位置づけようと目論むものであり、これまでに公表したいくつかの注釈・論考類と連動する。主として取り上げるのは、野坡ら編『すみだはら』（元禄七年六月二十八日奥）と並び、「かるみ」を代表する撰集として名高い子珊編『別座鋪（註）』（同年五月八日奥）であり、また、この続編として芭蕉没後に編まれた子珊編『続別座敷』（元禄十三年五月奥）である。ともに杉風を中心とする深川系の俳書であり、前者は、芭蕉餞別会における「紫陽草や」歌仙を収録することで著名。また、子珊自序に「今思ふ躰は浅き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに軽き也」という芭蕉の言を引くこ

とても注目される一方、その自序によると、芭蕉が一座しない残る四歌仙は「有合^{ありあひ}たる巻く」を集めたものという。果たして、五巻を通しての特色はあるのか、芭蕉の理念は全体に反映しているのか、関心がもたれるところである。また、後者は、芭蕉没後に「かるみ」はどのような形で継承されつつあったのか、という課題を究明する上でも、興味深い一書といえる。こうした問題意識に基づき、以下、両書所収の連句作品を分析する。

一 「かるみ」をめぐる問題

分析・考察を進める前提として、まず、これまでいくつかの注釈や論考で採用した方法と、得られた結論について略述する。

付合については、作品相互の比較を容易にするため、また、印象批評的な解釈を避けるため、より客観性のある同一の手続きに従うことが肝要と考え、模索の末、次の三段階で読むこととした。すなわち、①作者は前句をどのように理解し、とくにどの点に着目したか「見込」、②その見込に基づいて、作者はどのような場面・情景・人物などを描こうと考えたか「趣向」、③その趣向を具体化するために、作者はどのような素材と表現を選んで一句にまとめたか「句作」、の三段階である。このような付合の把握は、作者の脳内活動を追認することにもなり、各過程(①↓②と②↓③)で作者が発揮した想像力のほども見えやすくなる、と期待したわけである。

最初に取り組んだのは、『すみだはら』に収められ、先行研究での評価も高い芭蕉・野坡両吟の「むめがゝに」歌仙^①。すべての付合を分析して見えてきたのは、①におけるたしかに見込、②における独創的な趣向立てもさることながら、それ以上に興味深いこととして、③でさらにその先まで想像を重ねた句作をしていることである。しかも、句の表面にはそうした想像の痕跡をほとんど残さず、ただ具体的な一事を平明に表現するだけなので、ともす

れば、脈絡のない二句が並んでいるだけにも見えてしまう。それは、②↓③で用いた想像力が並々でない上、句作に当たって余事を潔く捨象しているからなのであり、その点を見逃すと、作者たちは情調に応じた応酬をくり返しているに過ぎない、といった誤解を生むことになる。平明さが「かるみ」の重要な要件であることはたしかながら、それは句の姿がそうであるに過ぎず、付句が成るまでの思考活動は実に高度かつ複雑なのであった。

次に取り上げたのは、『別座鋪』における芭蕉・子珊・杉風・桃隣・八桑による「紫陽草や」歌仙^②。各付合の分析を通して、いくつかの問題点が浮き彫りになってきた。気になるのは、②↓③で想像力が駆使されず、①↓②で得た発想に満足して、その趣向をそのまま句にした付合がまま見られることである。また、②における想定に必然性の不足したものがあり、これは前句の吟味不足が大きな要因と考えられる。さらに、三句における転じの悪さや、類似した表現・内容のくり返しも気になる点で、「むめがゝに」歌仙を基準にすれば、やや蕪雑な一卷といわざるをえない。考えてみれば、「かるみ」を志向する時期の芭蕉一座連句といえど、連衆や興行の状況が変われば、相応の差異があってもおかしくないものであった。

そこで、野坡系・杉風系と並ぶ沾圃系と一座した作品にこれを確認すべく、沾圃ら編『続猿蓑』(元禄十一年五月奥)所収の「八九間」歌仙を、小林孔氏との共同作業で検討した^③。推敲過程の知られる一卷ゆえ、どのように直されたかをたどっていくと、作者たちの力不足は②↓③に顕現しがちであり、芭蕉はここに改変を試み、格段に興味深い付合へ昇華させていたことが確認される。この連衆から芭蕉が抜けた沾圃・里圃・馬寛による「雀の字や」歌仙^④を見ても、予想された通り、②と③がほぼ一体化したような付合が少なからずあり、詞から詞への連想や、表現・内容の類似も目立つ結果となった。そして、以上の分析・検討から、芭蕉の捌き・手直しが作品の成否を大きく

左右する要因であり、「むめがゝに」歌仙はその最もうまくいった例に相違ない、との見方が導き出されてきた。

この仮説を検証すべく、次に『すみだはら』の全体を考察の対象とした。⁽⁵⁾「むめがゝに」歌仙を含む連句八巻を通観して、明らかに変わったのは、一書を通してよく似た表現・内容が多く、三句がらみの箇所も少なくないという事実である。とくに表現面で目立つのは、擬態語や疊語類の頻用であり、これは、「むめがゝに」歌仙の芭蕉発句で「のつと」が使われたことも符合する。その使用がただちに負の要因となるわけではないにせよ、過度の重出は単調さを招く結果ともなる。内容面では、労働にまつわる苦勞と家庭内のいざこざが好んで取り上げられ、恋の句も後者と結びつけて詠まれることが多い。これも重なれば、やはり陳腐の評を免れないであろう。

こうした現象面だけを見ると、「むめがゝに」歌仙と他の連句作品の間に、さほどの違いはない。にもかかわらず、読後の印象がかなり異なったものになるのは、「むめがゝに」歌仙の場合、同様な人物を取り上げる際には設定を大きく変え、②↓③の段階で飛躍的な想像力を働かせた上、思い切った捨象を行っていたからである。他作品の連衆たちも、芭蕉が平明性と日常性を追求していることに理解を示し、歩調を合わせようとしていることは間違いない。付合の機構も相応に習得し、一定レベルの作品を生み出すまでになっている。では、なぜ②と③が近くなるのかといえば、話題が身近なために趣向が立てやすく、そのことに満足して、さらなる想像を放棄しがちなためである。ここに、模索の上で「かるみ」に至った芭蕉と、芭蕉作品の可視化された部分のみを学習する門弟との、違いがあるというべきであろう。

以上が、ここ数年、「かるみ」を標榜する芭蕉とその門弟たちが残した連句作品を対象に、分析を行ってきた方法と過程と結論である。これを前提として、次節以下、『別座鋪』と『続別座敷』を検討していくことになる。あ

らかじめ、収録される連句作品の連衆を一覧にしておく、『別座鋪』では、

○芭蕉・子珊・杉風・桃隣・八桑「紫陽草や〈夏季〉」歌仙(別A)

○桃隣・杉風・子珊・李里・八桑・子祐・太夫・龜水・楚舟「取あげて〈夏季〉」歌仙(別B)

○八桑・楚舟・桃隣・子珊・杉風・龜水・李里・太夫・子祐「若竹の〈夏季〉」歌仙(別C)

○子珊・杉風「晚鐘を〈秋季〉」歌仙(別D)

○蒼波・杉風「有明や〈秋季〉」歌仙(別E)

となり、『続別座敷』では、

○杉風・楚舟・子珊「埋火や〈春季〉」歌仙(続A)

○子珊・楚舟・子祐「旅に見し〈春季〉」歌仙(続B)

○楚舟・子珊・杉風「冬瓜一つ〈冬季〉」歌仙(続C)

○岱水・杉風・利合・太夫・曾良・依々・子祐・希志・石菊・楚舟・潤子

「草の戸の〈冬季〉」歌仙(続D)

となる(「追加」の八句は省略)。以下の論述では、()内の略号で各作品を呼称することとし、『すみだはら』の連句に言及する際も、同じく所収順に「炭A」―「炭H」で表記する。

二 擬態語・疊語類の使用

最初に、『すみだはら』に多く見られた擬態語・疊語類について調査する。夙に島居清氏の『すみだはら』論⁽⁶⁾で、「擬態語また擬声語に類する俗語の用法と、および重ね詞・疊語の類が目立つ」と指摘されたものであり、『すみだはら』と同時期の『別座鋪』や、六年後の『続別座敷』でも同じ傾向が見られるかどうか、興味の対象となる。

なお、「擬態語・疊語類」と私に呼称はしたものの、細かく分ければ、「の

つと」のような擬態語、「どたり」のような擬声語、「宵々」のような疊語、「ふわふわ」のような擬態語かつ疊語があり、これらに準ずる表現もある。すべてを一括してよいかという問題はあるし、品詞の種類によって分ける必要はないのか、普通語でもあるもの（「時々」「わざわざ」など）はどうするのかなど、考慮すべき点は少なくない。しかし、作者たちはそうした分別意識をもたず、連鎖反応的に使用したようなのであり、細分化にさほどの意味は見いだせそうにない。『すみだはら』を分析対象にした際と同様、島居氏の指摘に倣う形で、すべてを擬態語・疊語類として扱うことにする。

煩雑さを厭わず、『すみだはら』『別座鋪』『続別座敷』の順で、私に判断した使用回数と使用例を挙げてみよう（原本に「く」が使われた場合も、「時く」などは「時々」と表記する）。まず、『すみだはら』では、

・炭A：7／36（「のつと」「処々」「ばら／＼と」「ひとと」「つらりと」「方々に」「一夜／＼」）

・炭B：8／36（「細々と」「あちこち」「節々」「てう／＼しく」「漸と」「ぐはた／＼と」「とう／＼」「ひらり／＼と」）

・炭C：4／36（「そつと」「どたりと」「すた／＼」「そよ／＼」）

・炭D：9／100（「どろ／＼」「ほか／＼と」「ほろ／＼」「段々に」「ひつそりと」「年々」「だ／＼くさに」「はや／＼と」「うそ／＼時」）

・炭E：0／32

・炭F：2／36（「どん／＼」「ほんのりと」）

・炭G：3／36（「どた／＼と」「ちら／＼と」「どこ／＼ともかも」）

・炭H：5／36（「ふは／＼」「ばら／＼」「宵々」「鬱々と」「わざ／＼」）

となる。巻ごとの違いはあるにしても、総じていえば、炭Aで見せた芭蕉の積極的な使用（「のつと」「ばら／＼と」「ひとと」「方々に」）が、集の全体にも影響しているように見えるべきなのであろう。

例外的な炭E（其角と孤屋の両吟興行）に関しては、連衆の其角に、或は「すつと」「きつと」などいへり、師の「のつと」は誠の「のつと」にて、一句の主なり。門人の「きつと」「すつと」はきつともすつ共せず、尤も見苦し。晋子^{しんし}是^{これ}を学ぶ事なし。（『旅寝論』）

との認識があり、この興行に際しても、好んでこれらを使う風潮に拒否の姿勢を示したのだと見られる。E以外での多用から判断して、孤屋の場合は其角の意向を尊重し、使用を控えた可能性が高い。だとすれば、ここから導き出せるのは、擬態語・疊語類の使用がかなり意識的なものであったこと、一座する連衆によって様相が変わること、の二点となる。

これも同じ拙稿で指摘した通り、嵐雪が一座した炭Bにおいて、擬態語・疊語類を仕掛ける野坡・利牛に対して、嵐雪は時にこれに応じる様子であったのも、象徴的な一事といえる。もちろん、連句興行の流れによって差は出てくるものの、『すみだはら』の場合、総じて使用に積極的なのは編者たち（野坡・孤屋・利牛）であり、芭蕉からの感化を形にすべく励んだ結果、擬態語・疊語類の使用が最も目につきやすい形で表面化したのであろう。巻ごとの差異は、連衆の認識や反応にも関わっていたと考えられる。

では、野坡・孤屋・利牛らが参加せず、ほぼ深川系の連衆で占められた観のある『別座鋪』の場合はどうか。これも一覽にすれば、

・別A：6／36（「起々」「かん／＼と」「どろ／＼」「ばら／＼と」「まんまと」「うつ／＼と」）

・別B：7／36（「そつと」「きり／＼」「てら／＼と」「ひつそりと」「てんで」「きつかりと」「うそ／＼暮」）

・別C：1／36（「につこりと」）

・別D：1／36（「こんもりと」）

・別E：2／36（「けふも／＼」「剃つそられつ」）

となる。やはり、芭蕉が一座するAでの多用が確認され、興行時期や連衆が重なるBの場合も、これに準じてとらえることができよう。炭Aや別Aより以前の興行であることが明らかなD・Eの数値の低さは、未だその志向性が共有されていなかった(夏季発句のCも、あるいはD・Eと同年の興行であったか)ことを、表しているのかもしれない。いずれにしても、「有合たる巻くく」をとり集」と子珊序にある、同書の寄せ集めの性格は、擬態語・畳語類の使用頻度という点からも肯定できそうである。

ところで、右に「芭蕉の積極的な使用」「芭蕉からの感化」「その志向性が共有されていなかった」などと記したことについては、誤解のないよう、多少の説明を加える必要がある。芭蕉の「のつと」が評判となり、門人の模倣を呼び起こしたことは、先に引いた其角の発言からも明らかで、芭蕉自身、炭Aなどで積極的に擬態語・畳語類を使っている。しかし、芭蕉もすべての興行に多用しているわけではなく、不使用の場合もある。それは、使用自体に意味があるのではなく、効果を見定めて使わなければならないことを、よく自覚していたからに相違ない。多用の風潮は野坡らの周辺で起こり、これが杉風・子珊らにも広まっていた、というのが実情であろう。⁸⁾芭蕉の付句を注視し、これに倣おうとする意識が強いため、かえって芭蕉の本意から離れ、表象面ばかりが際立つ結果となるわけである。

続いて、『続別座敷』についても、同じく一覧化を試みれば、

- ・続A: 4 / 36 (「ほつこりと」「ひつたと」「はつきりと」「すらりと」)
- ・続B: 3 / 36 (「はんはりと」「ちりゝゝ」と「きよろゝ」と)
- ・続C: 2 / 36 (「枝々」「ぐどく」と)
- ・続D: 7 / 36 (「こつとりと」「時々」「年々に」「こくり」と「ころく」と「作く」と「順々に」)

となる。普通語の「時々」「年々」「順々」を除けば、各巻の用例数は二〜四。

きわめて高い使用頻度ではないものの、『猿蓑』等では一歌仙に一例外内外の使用であったことからして、高めの数値であるとはいえよう。『別座鋪』の時期に受けた「感化」はそのまま残り、擬態語・畳語類の使用も芭蕉流俳諧の一要素として、深川系連衆の間に共有が保たれていたのである。

擬態語にせよ畳語にせよ、俳諧では貞門以来の使用実績があり、狂歌・川柳・歌謡など、隣接する文芸ジャンルの中にもこれを活用するものが少なくない。芭蕉たちの試みがもつ意味や功罪は、それらとの比較や歴史的展開も視野に入れ、慎重に検証しなければならないであろう。その点は別稿を期すとして、ここでは、『すみだはら』に見られた特色が『別座鋪』にも反映し、『続別座敷』の時点まで持続していたことを、確認しておきたい。

三 瑣事への関心

次に、『すみだはら』の分析から浮上した素材の偏重という問題が、『別座鋪』『続別座敷』にも見られるかどうかを検証する。前述の通り、『すみだはら』には、労働上の愚痴めいた話題と家庭内のいさかいに類する話題が多く、後者と連関して、「娘」「嫁」「婿」「母」「弟」「祖父」「祖母」などの語がしきりに使われている。阿部正美氏が「軽みの時代(上)(中)」⁹⁾でこの時期の芭蕉連句の特色を探り、「有り勝ちの世態」「市井の人々の俗情」「滑稽のうちに悲哀のある世相の一こま」「当代庶民の人情世態」などを指摘したことに通じるものであり、注(5)の拙稿は、それらの頻出を問題視したのでもあった。

そして、注(2)の拙稿では、芭蕉一座の別A(「紫陽草や」歌仙)に似た内容がくり返され、三句がらみや観音開きの傾向もあることを指摘した。仕事や生活にまつわる話柄が多く取り上げられ、裕福な暮らし、小ずるく立ち回る人、生活者としての嘆き、旅や遠出の疲労・倦怠感などが、それぞれ

くり返されている。興味深く共感を呼ぶ内容ではあっても、反復は倦怠感に通じ、また、そうした付合では、②と③の距離が短くなりがちでもあった。「ちいさき顔の身嗜みよき 八桑／商もゆるりと内の納まりて 芭蕉」(初ウ4・5)を例にとると、付句作者の芭蕉は、前句を律儀な商人と考え(①)、その人柄が招く幸福を想定し(②)、商売も家内も順調・円満であるとした(③)わけで、見込に基づく趣向のままに(すなわち、そこからほとんど発展をさせずに)句作していることが了解される。この歌仙に目立つ特徴であり、指導する立場の芭蕉自身がこうした付合をなしている事実を、看過するわけにはいかない。炭A(「むめがゝに」歌仙)との間には相違があり、芭蕉の一座が常に作品の高水準を保証するわけではないという、当然の一事に気づかされることになる。では、芭蕉が一座しない、『別座鋪』の他歌仙はどうか。

別B→Eを通して読むと、身の回りでいかにもありそうな題材を取り上げ、②と③が近くなりがちであることなど、やはり別Aと共通する部分が多く、また、大枠では『すみだはら』とも傾向を等しくしていることが確認できる。たとえば、家庭内の呼称による人物の表現を挙げれば、

- ・別A：女房
- ・別B：娘・乳母
- ・別C：さし継(次男)・智・祖父・内儀
- ・別D：夫婦・御乳(乳母)
- ・別E：老・夫・親仁

となり、『すみだはら』ほどの数ではないものの、一定の利用状況ではあるといえよう。注目したいのは、これら(とくに女房・娘・嫁・智など)が恋の場に使われがちなこと、この点も『すみだはら』と一致する。

たとえば、別Cにおける「はなえ立たる新敷網 杉風／智とりてにつこりと成表つき 亀水」(初ウ8・9)の場合、「智とり」によって恋にはなるも

の、恋の情は薄く、むしろ婚姻による家内の安寧が眼目の付合といえる。しかも、同じ歌仙内に「雉鳴やけふは二つは暑からふ 八桑／祖父の病に小言八百 楚舟」(名オ1・2)や、「惣じてが物を苦にせぬ生れつき 杉風／客挨拶に内儀汗かく 亀水」(同5・6)などが続くのだから、どうしても、連衆の関心は家の問題に向かいがちであるとの印象が強くなる。『すみだはら』に比べて使用頻度は下がるものの、家族の話題が『別座鋪』でも相応に見られることはたしかで、ここにも一種の「感化」が想定されよう。

そして、擬態語・疊語類の使用と同様、これも『続別座敷』の中に一定の割合で定着していることが認められる。たとえば、家庭内の呼称では、

- ・続A：大兄・御袋・娘
- ・続B：母
- ・続C：弟・妹・若隠居殿
- ・続D：智

といった使用例があり、付合の様相からも、『別座鋪』との連続性は首肯されてよい。こうした語と恋が結びつきがちな点も同一ながら、恋の情がいつそう希薄になっていることは注意を要し、これは次節で改めて問題にする。なお、「小頭」「庄屋」「大工」など、職業に関連した人物の呼称もこれらと同様の働きをするもので、こちらは、労働の話題を好んで取り上げることにつながっている。挙例は省略したものの、こうした語の活用も、『すみだはら』『別座鋪』に共通して見られることである。

さらに視点を広げ、連衆たちの嗜好という点から『別座鋪』と『続別座敷』を読んでいくと、次の二つが特徴的なこととして浮かび上がってくる。その一は、ささやかな(見方によってはどうでもよいような)事象に目を向けることが多く、素材の選択でも低・小・卑といった傾向を示しがちであること。これは、『すみだはら』に仕事や家庭の話が多いことと、基本的には根を等

しくしていよう。そして、その二は、「世の中を穿鑿すればみんな恋 楚舟」(別Cの名才11)のように、内容の一般化を図り、概括的な把握を示す付句が散見されること。これらが結びつき、既述した他の要素も加わって、別座鋪調ともいべき作品世界が顕現する。実例を挙げて見ていくことにしよう。

まず、一句に選ぶ素材という点では、華美で豊富なイメージのものは僅少で、ありふれたものが好んで取り上げられている。『別座鋪』から任意に付句を挙げて、「低ひ出し家は屋根計也 太犬」(別Cの初ウ1)、「すくなき鮎を追廻しけり 子冊」(別Dの初オ5)、「干鰯の上をもゆる陽炎 蒼波」(別Eの名ウ4)と、句作段階でわざわざ「低ひ出し家」「すくなき鮎」「干鰯の上」を選んでしまふところに、連衆共有の好みが見られるわけである。

一句に低・小・卑といった傾向が見られることは、総じて世間話のような内容が多いことにも通じ、その傾向はとくに『続別座敷』で顕著となる。たとえば、「ごろくく」と磨の鳴出す 潤志/隣には見馴ぬ客の子を連れて 希志」(続Dの名オ2・3)は、白の音に馳走の準備を看取し(①)、隣家の来客への関心を想定して(②)、それを知らない子連れの客とした(③)のであり、家人と「隣に見慣れない客が来ているね」と話す様子までが想像されてくる。その意味で、興味深い付合には違いないものの、話題自体は取るに足らない日常会話風であり、こうした事例は枚挙にいとまがない。

一般化の例としては、『別座鋪』の「すばしりとれて鱸丸焼 蒼波/どこにても親仁は下駄に杖を指 蒼波」(別Eの名オ10・11)を取り上げてみよう。「すばしり」はボラの幼魚で、体長が五〜十センチほどのもの。これがたくさん獲れ、種々の料理に使うことから、前句を暇に任せた趣味的な釣りで見込み(①)、その人をいかにも年配者らしい人物と想定し(②)、いつも下駄ばきで杖を使うとした(③)もの。もちろん、下駄に杖は前句の釣りの人のいでたちながら、わざわざ「親仁は」と言表化したため、読者には、そ

れが親爺一般を象徴するありようとして印象づけられることになる。

これが単なる偶然の産物でないことは、同書に「我顔の青きを恋となぶらるゝ 子冊/二番手代の身持つれなき 杉風」(別Dの初ウ3・4)や「こんにりと鳥居隠るゝ華の中 子冊/医者夫婦の長閑成日に 杉風」(同初ウ11・12)といった付合があることから明らかで、二番手代にはありがちなことであるとし、医者夫婦ならばそうであろうとするのは、いずれも「親仁は…」と同様の把握方法にほかならない。『続別座敷』の「小頭の勝手は 余程よさうに 楚舟」(続Bの初オ5)や「庄屋の声は分に聞ふる 子冊」(同名オ10)など、その職らしさを言い立てた付句も同様で、両書にはこうした例が少なからずある。

これらを要するに、各連衆は身の身の瑣事に目を向けながら、そこからある世代・階層・職種等に共通する性向を探り出そうとし、時に世間一般のこととして語る傾向にあったことになる。浮世草子の気質物にも通じるところで、「娘」「智」「親仁」などの語を使うこと、家庭と仕事の話題を取り上げがちであること、世間話風に一句を形象していくこと、擬態語・疊語類を多用して日常茶飯事を描くことなど、すべてはここに収斂していくのであろう。類型的であることは措き、各付合にすぐれた創作性があるかどうかとも別として、両書共通の大きな特色がここにあることは間違いない。

四 希薄化する恋

前節で触れた通り、『別座鋪』と『続別座敷』の比較から浮上する問題の一つに、恋の情の希薄化ということがある。その実態を明示するため、煩を厭わず、歌仙ごとに恋の句を前句とともに掲出してみよう。恋か否かの認定は時に難事ながら、貞門以来の恋の詞と付合の内容から私に判断し、詞寄せの類に載る恋の詞やそれに準じる表現には傍線、説明が必要なものは点線

を付す。また、各歌仙の恋の句数と回数がわかるよう、一卷に二句と一句で計三句の恋があれば3（2+1）／36、といった具合に記すこととする。

別 A 1／36

- ・ 昼の酒寐^ねてから酔^{よひ}のほかつきて

芭蕉

五つがなれば帰ル女房

子珊（名才3・4）

別 B 3（2+1）／36

- ・ 昔より稲荷の前の挽細工^{ひきざいく}

杉風

唯着^{ただき}のまゝで娘ほしがる

桃隣

有明の踊^{をどり}の果は恋になり

李里（初ウ5〜7）

- ・ うそく暮^{くれ}にはづす衣張^{きぬばり}

桃隣

花蓬乳母^{はなもも}が男^{おとこ}の舟便^{ふねだり}

八桑（名ウ4・5）

別 C 2（1+1）／36

- ・ はなえ立^{たて}たる新敷網^{あたらしき}

杉風

簪^{かんざし}とりてにつこりと成表^{なるおもて}つき

亀水（初ウ8・9）

- ・ 合点^{がてん}させたる縁^{したな}の下内^{したな}

八桑

世の中を穿鑿^{せんさく}すればみんな恋

楚舟（名才10・11）

別 D 3（1+2）／36

- ・ 合^{あは}けたる葉捨^{すて}おく

杉風

我顔^{わが}の青きを恋となぶらるゝ

子珊（初ウ2・3）

- ・ 木に馬つなぎ杏^{くつ}をすげぬる

子珊
子珊

大袖^{わかしゆつれ}の若衆^{さめしやう}連たる讃岐衆

子珊

うき寝^{おこ}を起す鯛^{はまやき}の浜焼

杉風（名ウ1・2）

別 E 1／36

- ・ 外に涼しく糸通^{いと}又箒

杉風

我夫^{わがつま}は宮を作り^{しむら}に下総^{しもふさ}へ

杉風（初才6・初ウ1）

続 A 1／36

- ・ 悲しかり嬉しかりたる盆^{すげ}も過

杉風

娘^{むすめ}すらりと雀生^{せうせい}立秋

楚舟（名才7・8）

続 B 1／36

- ・ なまぬくとうて多^{おほ}ひ米虫^{こめむし}

子珊

切声^{きりこゑ}に花^{つかひ}の使^{つかひ}はよい男

子祐（名ウ4・5）

続 C 1／36

- ・ 吹^ふかぬ風の噂^{なかな}の秋半

楚舟

月見の客に妹^{いも}が小料理

子珊（名才7・8）

続 D 1／36

- ・ 羽織^{きくずうち}の木屑^{きくず}打振^{うちふり}着る

希志

祝事^{いはひごと}仕舞^しふて初^{はじ}に簪^{かんざし}が来て

利合（名才12・名ウ1）

一見して了解されるのは、『続別座敷』の恋の句がきわめて少ないことである。すなわち、各巻に恋の場は一回で、すべてが一句どまり。その句にしても、本来的な恋句の内容であるとはいえず、「娘」「よい男」「妹」「簪」の語を用いたことで、最低限の恋の条件を満たした恰好である。重要な点であるゆえ、一例ずつ説明を加えておきたい。

続 A の「雀生」は用例未詳ながら、「雀」はまつすぐなことを意味し、こは娘の立ち姿のよさをいったとおぼしい。続 B では、「よい男」が「色男」「美男」等に準じて恋の詞になり、「花の使」も玄宗皇帝が美女を集めた際の「花鳥使」を踏まえる可能性はあるにせよ、付合として恋の情を強く示しているとはいいたい。続 C も、月見客に妻の料理を振る舞ったというだけのこと、かろうじて「妹」の語で恋の句としたもの。続 D の「簪」に至っては、

単独では恋の詞にならず(『はなひ草』『番匠童』)、婚姻を意味する「智入(取)」で恋になるとされるもの。内容的にも、ここは娘の夫がやって来たことにほかならず、「智」を恋の詞と拡大解釈きみに使ったと判断される。

以上のことから判断して、『続別座敷』の連衆は恋の句を詠むことに消極的である、との結論に至らざるをえない。つまり、連句の約束事として必要であるから、形式的に詞を使い、恋の句を確保したに過ぎないのである。しかも、「よい男」を除けば、選ばれるのは「娘」「妹」「智」と家族間の呼称のみ。偶然の一致ではなく、前節で示した通り、身近な話題に家族のあれこれを取り上げがちなことと、通底する一事と見てよからう。そして、その結果、恋の情が乏しい恋の付合ばかりが誕生することになる。

これに比べると、『別座鋪』では、恋の句を出すことに一応の積極性は示しているといえよう。数量的にも、一卷に二箇所(の恋の場を設けたものが半数以上あり、中には二句にわたる恋もある。が、それとて、蕉門撰集全体の中に置いて見れば、決して高い使用数であるとはいえない。

比較のため、『冬の日』『猿蓑』『すみだはら』の数値だけを示せば(各書は「冬」「猿」「炭」と表記し、所収順にA以下の記号で作品を示す)、

冬 A	4 (2・2)	36	B	5 (2・3)	36	C	6 (2・2・2)	36
猿 A	2 (2)	36	B	4 (2・2)	36	C	4 (2・2)	36
炭 A	3 (1・2)	36	B	3 (2・1)	36	C	2 (1・1)	36
D	5 (2・2・1)	100	E	2 (1・1)	32	F	3 (1・2)	36
G	3 (2・1)	36	H	2 (1・1)	36			

となる。貞享元年興行の『冬の日』では、例外なく歌仙一卷に二箇所以上の恋があり、二箇所につき二句以上のものが大半。以後、元禄三・四年興行の『猿

蓑』から同六・七年興行の『すみだはら』にかけて、次第に恋の句が減少していく。例示は省略するものの、芭蕉一座の全連句作品を追いかけても、より多角的に撰集の調査を行なっても、得られる結果は同様。大局的には、『別座鋪』もこの趨勢の中に位置するわけである。

それでも、内容面にまで踏み込んでいくと、同時期の『すみだはら』と比べてさえ、恋の情の薄い付合が多いことに気づく。何より、「女房」「娘」「男(夫)」「智」と家族間の呼称を使った句が多く、そうした場合、別Cの「智とり」がそうであるように、その語に恋を任せ、付合では家族の安寧といった別の内容を扱うことになりがちである。別Bの「娘」も、前句に付けた段階では女兒をほしがるという意味であり、詞の使用で恋としたものにほかならない。付句は「娘」を乙女の意に取りなし、「恋」を強調する付合を企図したのであり、わずかながらも、ここに、恋を積極的に取り上げようとする姿勢が窺知されるわけである。

このほか、残る五句中の三句が「恋」の語を使用するのも気になる点で、やや安易との印象を拭いきれない。実際、三段階の分析を試みても、おおむね②↓③の距離が短いのであり、恋句とすることを優先して、前句の突き放しや想像力の発揮がおろそかになったと考えられる。⁽⁵⁾別Cの「世の中を穿鑿すればみんな恋」の場合は、前節で述べた通り、必然性が欠如した一般化の例といふべきもので、たとえば、「さまぐに品かはりたる恋をして 凡兆／浮世の果は皆小町なり 芭蕉」(『猿蓑』『市中は』歌仙)と比較しただけでも、その達成度の違いは歴然といえる。

残る別Dの「若衆」「うき寝」一連は、本書の中ではやや異例の詞を使っており、逆の言い方をすれば、それほど『別座鋪』の恋は画一的变化に乏しいということになる。その「若衆」の句にしても、詞に頼って恋にしたという面が強く、一句の説明調も気になるところ。続く「うき寝」は、これが

一時的な契りを意味することから、一応は恋の句になるものの、一句としては浜辺に旅寝したことを詠み、恋の情から離れている。他の点線部についても一言すると、別Eの「夫」は恋の詞とされないものの、「我夫は…」には遠い地の夫を慕う情があり、恋として問題ない。別Bの「男」もこれに準じたものであり、句体によって恋になる「便(文)」と合わせ、恋にしたのであろう。

以上に見た通り、一応の数値を示す『別座鋪』にしても、多彩な恋のありようを豊かな情感で描いたわけではなく、むしろ類型的・形式的な側面が目立つものであった。『続別座敷』ではその傾向に拍車がかかり、娘・智などの語を使うことでよしとする。それはどうしてなのか。また、それは芭蕉の意向にかなうことなのか。最後にこの問題を取り上げ、杉風周辺の深川連衆が「かるみ」をどう継承しようとしたかについて、考えることにしたい。

五 『別座鋪』『続別座敷』と芭蕉

先に『冬の日』『猿蓑』『すみだはら』の恋句の数値を挙げ、減少傾向が見られるとしたことは、和及著『誼諧番匠童』(元禄二年三月刊)に、

恋の句、二句より五句までする法なれ共、今は二句にて捨て吉。いかにとなれば、心同じやうなれば、三句にもどる味有故也。能々離れたる恋ならば、三句迄もすべし。

とある通り、俳壇全体の傾向でもあった。すなわち、恋は五句まで続けてよいものだけれど、似た内容になりがちであるから、今は二句でやめてよいのだという。芭蕉も恋の句が難しいことを指摘して、

予が一句にても捨てといふも、いよく大切におもふ故也。(中略)かく計大切なるゆへ、みな恋句になづみ、僅三句一所に出れば幸とし、却而巻中恋句希也。又、多くは恋句よりしづり、吟おもく、一巻不出来

になれり。此故に、恋句出て付よからん時は二句か五句もすべし。付がたからん時はしめて付ずとも、一句にても捨てといへり。かくいふも、何とぞ巻面の能、恋句も度々出よかしとおもふゆへ也。『去来抄』

と、付けがたい時は一句で捨ててもかまわないとする。「恋別而大切の事也。なすにやすからず。(中略)一句にても置べき事もあらんか」(『三冊子』)というのも同じ趣旨の発言で、要するに、恋句は大切に付けられるものではないから、一句の場合があつてもよいというのである。

一方、芭蕉の没後、杉風が元禄八年六月一日付で麁時宛てた書簡には、恋の句は二句にて捨てし。若宜付句無之時は一句にても捨てし。

とある。これが芭蕉の考えを基盤とすることは明らかで、「一句にても捨てし」が芭蕉の「一句にても捨てよ」と符合することとしかである。しかし、芭蕉が「大切におもふ故」「度々出よかしとおもふ故」と強調した根本精神は生かされることなく、「付よからん時は二句か五句もすべし」の部分も捨象され、「二句にて捨てし」と断ぜられるに至っている。これは、去来への教示と杉風へのそれが違っていたということでは、おそらくないはずである。

一体、他者の言を都合よく理解し、それをその人の思考と見てしまいがちなのは、人の常ともいうべきこと。この場合も、芭蕉の教えは杉風の中で理解しやすい形に単純化され、それがそのまま定着していたのであろう。そう考えると、『続別座敷』の各巻に恋が形式的な一句しかなかったことも、容易に理解することができる。すなわち、深川連衆にとっては「一句にても捨てし」が芭蕉の示す指針であり、そうであれば、何も難しい恋句を苦勞して詠む必要はないことになる。ことに杉風の場合、生質として苦手であったのか、『別座鋪』『続別座敷』を通して恋句を詠むことはほとんどなく、詠んでもきわめて恋情が薄いものばかりである。そして、元禄期に杉風が一座した連句作品を渉獵しても、その点はほとんど変わらないのであった。

当の芭蕉はどうかといえば、この時期も、「雪の跡吹はがしたる臘月 孤屋／ふとん丸けてものおもひ居る 芭蕉」(炭Cの初才11・12)や「上をきの干葉刻もうはの空 野坡／馬に出ぬ日は内で恋する」(炭Gの初才7・8)など、恋句に積極的な姿勢を示し続け、みごとな成果を挙げている。「ものおもひ居る」も「恋する」も、前句の情をしつかり受け止め、ありうる場面を構想した上で、これを簡潔に表現したものであり、決しておざなりに恋の詞を使っているのではない。「恋別而大切の事也」という認識の下、「恋句も度々出よかし」の願いを自ら実践すべく、苦心を重ねていたわけである。しかしながら、この思いが杉風に伝わる(あるいは共有される)ことはなく、「一句」の語だけが独歩して、『続別座敷』における恋の軽視に至り着く。そして、これは、恋の軽視という一事にとどまる問題なのではない。

現存する作品を見る限り、貞享以後、杉風は芭蕉と連句興行をともにする機会を得ていない。ようやく一座を果たしたのは元禄六年九月の「十三夜」歌仙(『芭蕉袖草紙』等)で、同年冬の「雪の松」歌仙(『すみだはら』H)と「雪や散る」半歌仙(『継はし』)、七年五月の「紫陽草や」歌仙(『別座鋪』A)がこれに続く。千載一遇の好機とばかり、杉風は芭蕉俳諧の要諦を習得しようと努めたであろうし、別Aは最後の同席となっただけに、中でも強い印象を残したに相違ない。擬態語・疊語類の多用も、日常的な瑣事への好尚も、②↓③の距離が短い付合も、すべてこの歌仙に見られたという事実、そして、同歌仙の恋は「女房」を使った一句のみであった事実を、決して軽視するわけにはいかない。杉風ら深川連衆はこれらを受けとめ、同歌仙を巻頭に『別座鋪』を編み、『続別座敷』にまたその再現を図ったのである。

山下一海氏の「「かるみ」をめぐる」⁽¹⁾は『別座鋪』を取り上げ、子珊序を引きつつ、「全体が新風を目ざして編纂されたといった緊張した書物ではない」とし、「「かるみ」の傾向は、巻頭の芭蕉発句による歌仙一卷にしか見ら

れない」とする。たしかに、別Aと別B・Eの関係は慎重に判断すべきことながら、傾向が違うと断定するのもまた早計であろう。『続別座敷』の諸歌仙(続A・D)が「紫陽草や」歌仙(別A)の延長上にあることは間違いない、その目で『別座鋪』の他歌仙(別B・E)を見直すと、多くの一致点が認められるのであり、別Aとの間に大きな懸隔があるとは言いがたい。その名の通り、『続別座敷』はたしかに『別座鋪』の続編といつてよく、杉風らはこれぞ芭蕉流と確信した方法を守って、揺れるところがない。問題は、それが「かるみ」をめざす芭蕉俳諧の、ある技術的な側面に過ぎなかったことである。

右の山下稿が、「芭蕉の用いる「かるみ」の語は、(中略)俳諧自由の明かるさをあらわし、同時に、文芸における絶対神拒否の厳しさを示している」と結論づけたことは重要で、その点、杉風らには自由な姿勢と厳しさの欠如が指摘されねばならない。冒頭に『俳文学大辞典』の記述を引き、「工夫が凝らされ」の部分に着目した通り、芭蕉の「かるみ」は、労を惜しまずに工夫を続け、しかもその痕跡を感じさせない平明さで、一事物を的確にとらえるものであった。芭蕉自身も模索の過程にあったわけであり、決まった様式はなく、常にうまくいくという保証もない中、門弟が各自の理解に基づいて継承しようとするのも、けだし当然のことではあろう。

以上、本稿では、『別座鋪』と『続別座敷』の分析から、杉風らが芭蕉流に忠実であろうとして、かえって本質から逸れていきがちになる様相を把握し、「かるみ」実践の難しさを再確認した。支考・野坡らの動向にも目を配り、より多くの作品を分析対象として、さらに検討を続けることにしたい。

注

(1) 拙稿『すみだはら』「むめがゝに」歌仙分析(『和洋女子大学紀要』50(平成22・3))。

- (2) 拙稿『別座鋪』『紫陽草や』歌仙分析(『和洋女子大学紀要』51〈平成23・3〉)。
- (3) 佐藤・小林『続猿蓑』『八九間』歌仙分析(『雑研究と評論』80〈平成23・6〉)。
- (4) 佐藤・小林『続猿蓑』『雀の字や』歌仙分析(『雑研究と評論』82〈平成24・6〉)。
- (5) 拙稿『すみだはら』所収連句の傾向(『和洋女子大学紀要』52〈平成24・3〉)。
- (6) 島居清著『芭蕉連句叢考』(桜楓社 昭和63年刊) 所収。
- (7) 追加の八句では、三句に連続して「をのく」「きよつと」「じやぐへく」が見られ、意識的な使用であつたかと見られる。
- (8) 元禄五年九月の「青くても」歌仙(『深川』所収)に「さらりく」と、十月の「口切に」歌仙(同)に「ばらく」とが見られるように、帰江後の芭蕉周辺では、少しずつこうした表現が試みられている。それが次第に一つの風潮となり、芭蕉の「のつと」が評判を得る中、野坡らが多用するようになったものと推測される。
- (9) 阿部正美著『芭蕉俳諧の展望』(明治書院 平成2年刊) 所収。
- (10) 『すみだはら』の内訳を示せば、炭A(娘)「お袋」「亭主」「女房」「嫁」、炭B(嫁)「子」「増・娘」「弟」「母」、炭C(娣)「祖父」、炭D(「子・父」「つれあひ」「嫁」、炭E(「祖父」「子」、炭F(「嫁」「老」、炭G(「むすめ」、炭H(「兄」「祖母)」という具合で、巻ごとの差はここでも指摘できる。それでも、大きな傾向として、各連衆にはこうした語を好む傾向があり、それが家庭内ドラマともいふべき話題の多出と軌を一にしているのは、たしかなことといえる。ちなみに、『猿蓑』(元禄四年刊)の四歌仙にはこの類の語が多々見られず、両書の間になき大きな違いのあることが察知される。また、『冬の日』(貞享元年奥)の五歌仙には「いもと」「いとこ」「娘」「子」「つま」「北の方」「母」の用例があるものの、多くは劇的な設定による付合で、『すみだはら』『別座鋪』との間には大きな断絶が認められる。
- (11) 前句を景気のない漁師の家と見込み(①)、新しい労働力の参入を想定し(②)、賀を迎えて笑顔であるとした(③)わけである。
- (12) たとえば、「逢度(あひたび)に去年(こぞ)より馬(うま)の直(ね)をねぎり 楚舟(そふね)／弟(おとう)が家の普請(ふしん)仕懸(しかか)る 子珊(こさん)」(続Cの名オ1・2)は、前句を金に汚い人物と見込み(①)、他人にきつく身内には優しく対応するさまを想定し(②)、弟の家の工事が始まるとした(③)もの。関心が内側に向かいがちな点は、『すみだはら』『別座鋪』に共通する特徴である。
- (13) たとえば、『別座鋪』では「居ながら物をねぎる袴屋(はかま) 子珊(こさん)／華持(もろもち)て針立殿(はりたて)を尋(たづ)ねる 杉風(すぎふう)(別Dの名ウ4・5)などの例がある。
- (14) 清登典子氏作成の「俳諧詞寄せ類」に見る「恋の詞」一覧―寛永から元禄期まで(『俳文芸』21〈昭和58・6〉)を参照した。
- (15) D3の初ウ2・3について分析を示すと、前句は葉の効果をあきらめているのだろうと見込み(①)、ここから恋の病を想定した(②)上で、顔の青白いのは恋のためかとかかわれる場面にした(③)もの。最初に抱いた恋わずらいの発想を突き放すことができず、そのまま句作を行なったものと見て間違いない。
- (16) 元禄六・七年に芭蕉と杉風が一座した連句作品を見ても、杉風は一度も恋を詠んでいない。
- (17) 山下一海著『芭蕉の論』(桜楓社 昭和51年刊) 所収。なお、同氏の「恋の芭蕉―連句批評のために―」(『国文学ノート』9〈昭和46・3〉)は恋句を数量の面から分析して、先駆的な一定の結論を導いている。が、本稿の目的とは重ならないため、敢えて言及はしなかった。
- 〔付記〕本稿は、平成二十五年度科学研究費補助金による研究課題「芭蕉五十回忌に至る「かるみ」の継承と伝播に関する研究」(課題番号:21520200)の成果の一部である。

佐藤 勝明(和洋女子大学 言語・文学系教授)

(平成二十五年十月十五日受付)